
図書委員会の恋愛事情

豆吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

図書委員会の恋愛事情

【Nコード】

N0670X

【作者名】

豆吉

【あらすじ】

泰斗高校図書委員会は共学なのに女子しかいない委員会。

メインカップルは第1章の二人ですが、メインの二人視点の話と視点を変えて図書委員プラス1の恋愛事情を連作風にしていく予定です。

視点は変わってもメインの二人の進展具合を、ゆるゆると織り込んでいきます。

前作同様まったり・のんびり・ご都合主義になると思います。

R15は、ほとんどないと思います。が念のため。

第1章：岡崎 涼乃の困惑 - 1 (前書き)

ずばり、第1章の主人公の好みは私の好みでもありません(爆)。

第1章：岡崎 涼乃の困惑 - 1

私、岡崎 涼乃は2年1組、部活はしてないが図書委員を2年連続務めている。

私の通う泰斗高校は有数の進学校だけど、服装に関しては制服を必ず崩さずに着用のことという以外に規定がないので、目立つ人というのは少なからずいる。

とはいえ、せいぜい茶髪にしたり化粧したりする人がいるくらいで、金髪とか緑、ピンクなんてお花畑みたいな人はいない。生徒自治がモットーだから、自分たちで規律を守るってことなんだろうな。

私とはというと、一度も髪の毛を染めたこともないし顔のケアは日焼け止めくらいで化粧もしたことない。だいたい、お金を使うなら私は好きな映画や小説、漫画にお金をかける。

中学のときは、「オタク」と一部の目立ち男子から嘲笑されて辛かったけど、この学校には、人のことを嘲笑するヒマがある人間はひとりもない。頑張って泰斗に入学してよかったと心から思っている。

今日のお昼休みは、天気がいいので外のベンチでお弁当を食べる。おやつに調理実習で作ったマドレーヌもついているゴージャスさだ。「そっいえば、涼乃見た？早川くんの机のうえのマドレーヌの山」と友人の川田 唯ちゃんが話し出す。

唯ちゃんは高校に入学してから「おかざき」と「かわた」で席が前後したことから親しくなった。唯ちゃんは背が高くショートカットの凛々しい女の子だ。調理部に所属している。

調理部は、ときどきモニタリングとして図書委員会にお菓子を提供してくれる。私たちは料理に対してアンケートに答える。

どうして、こんな協力関係ができたかというと、図書委員長の古

川先輩と調理部部長の長谷川先輩が親友同士だからだ。

「見た。さすが早川王子だよな。貢物で机が見えなかったよ、恐るべし。」ぱくん、とマドレーヌを口に入れる。

うーん、上出来。おいしーっ。しあわせー。

「早川王子……って涼乃……確かにあの山は貢物だよな」唯ちやんは噴出した。

早川王子、というのは私が親しい人の前でだけ呼んでる名前で、本名は早川 圭吾といい、目立ち男子として学年でも知られた存在。髪の毛はやや栗色でスラリとしたうえに顔も目鼻立ちが整い、笑ったときに歯がキラリーンと輝いていても違和感のない顔立ちをしており、さらに背後にバラをしょっていても「ま、似合うからいいか」と思われる類のイケメンである。

性格もまた悪くないときた。そいでもってテニス部というまさに「テニ リ」を具体化したような人なのだ。

なぜ、私が早川王子と密かに命名するに至ったかというと彼はとても女子にもてるからだ。

1年生のオリエンテーリングのときは彼のいる班に女子が殺到しちゃってなかなか決められなかったとか、バスの席決めでも女子同士がもめたとか、その手のエピソードで本が一冊できそうだ。“女子同士の揉め事の裏に早川あり”といのは既に定説となっている。

ああいう「いかにもモテまつせ」なタイプは苦手だな。私ももっと端正な感じで、なおかつ白衣が似合うメガネ男子なら完璧だ。科学の橋野先生なんて私にとっては相当萌えだ。私は理系科目は苦手だけど、理系人間はすてきだー。なんてことを、お昼に唯ちゃんと話していた。

このとき私は、まさか早川くんに聞かれているとは思わなかったのである。

第1章：岡崎 涼乃の困惑 - 1 (後書き)

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

2作目を書いてしまいました〜(汗)。

しかも現代です。学生の頃なんて遠すぎて覚えてないのに・・・そのぶん、妄想でカバーしていきます。

ですので「こんなやついないし、納得できないし」と思われる方はスルーしてくださいね。

今回、思い切ってR15をつけてみたのですが、果たして作者が書けるのか？

・2 (前書き)

涼乃、早川のことをこっそり「早川王子」と呼んでいたのがバレた
うえに逃亡の巻。

授業が終わると、唯ちゃんは部活に向かい、私は当番じゃないので家に帰る。

かばんを持って唯ちゃんと途中まで一緒に行くことにした。

ところが、帰ろうとする私を「岡崎さん」と呼び止める人がいた。振り向くと、そこには早川王子……もとい早川くんがいた。

彼も部活に行くのかテニス部のバッグを肩からかけて私をじっと見てる。

「岡崎さん、これから少し時間ある？」

うーん、早川くんに費やす時間はないな……なんてことは小心者の私は、もちろん言えず「少しなら。」と無難に答える。

唯ちゃんが「涼乃、なんかしたの？」とこっそり聞いてきたが、そんなわけないだろう。近寄りもしてないのにさ。

「わかんないけど……唯ちゃん。時間迫ってるから部活いきなよ。」

とささやきかえす。

「うん……今日の夜電話するね」と唯ちゃんは部活に向かった。

いつの間にか、教室には私と早川くんの二人だけになっていた。

もしや賭けか何かで、他に誰か隠れてるのでは？と私は思わず周りをきよるきよるしてしまった。

「なにしてんの？岡崎さん」

「え？えっと見事に誰もいないなーと思って。早川くんは部活行かないの？」

「今日は遅れるって部長に言ってるから」

テニス部の部長……ああ、あの黒縁メガネが素敵に似合うあの人が。一本筋が通ってしゅっとした感じがいいよなあ。あの人も白衣が似合いそうだ……早川くんとは真逆だな。

はっ、いかん。早川くんの存在を忘れそうになったよ。現実に戻らないと。

「そうなんだ。それで私に何か用でしょうか」なぜに敬語、私。

「あのさ、……岡崎さんはメガネ白衣が好きなの？」

「げ。なぜそれを知っている。」

びつくりした私の顔を見て、早川くんは「今日のお昼、俺、岡崎さんと川田さんがお昼食べてる裏に通りかかったときに聞こえちゃって。早川王子……って、俺って王子なの？」

このときの私の心境は「サ エさんにいたずらげられたカ オ」

いや「ママに0点のテストを発見されたの 太」もしくは……だめだ、おもいつかない。

「俺だって、別に好きこのんで、ああいう状況じゃないんだよ……」

「はあ……そつか。ごめんなさい。」自分のしらないところで変なあだながついているのに遭遇したら、不愉快だよなあ。私が全面的に悪いから、ここは謝罪だ。こっそり呼ぶのはやめないけどさ。

「いや……べつに謝らなくてもいいよ」

おお、笑った。なんとも思っていない私でも、なんだかまぶしいぞ。

「早川くん……それで、私に用ってなに？」

「岡崎さん。俺、岡崎さんのこと、1年のときから好きなんだけど、俺とつきあってくれない？」 早川くんは意を決したように私に告げた。

このとき、私がしたことは……再び誰かが見てるのではないかと、きよろきよろあたりを見渡したことだった。賭けでもなきや、こんなキラキラ王子がオタク女子に告白するか？漫画じゃあるまいし。

私は一瞬固まったあと、黙って早足で教室を出たのだった。

「え？岡崎さん??」と私の行動に呆然とする早川くんを残して……

•
•
o

- 2 (後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

涼乃、早川王子を置いて逃亡。それだけ驚いたということにしておいてください……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0670x/>

図書委員会の恋愛事情

2011年9月27日13時35分発行